

# 農を百姓自ら語る、

## そのために

福岡・宇根 豊

### 「生産」では「いのち」が語れない

「農って、いったい何だろうか」と、ふと思うことはないだろうか。「農業は、国民のための食料を生産する」という言い方に、「何か、違う」と感じることはないだろうか。

「生産物」と平気で言うが、「生産」は「工業用語」だったことを忘れている。「技術」もそうだ。あまりにも多くのことが、「農の言葉」で語られなくなった。どうしてだろうか、と考える「哲学」がない。

苺の植物工場を見学に行った。一株一株生育が違うのはなぜか、と質問した。「ごもっとも、しかしそこは担当者、観察して対応しています」と言う。

なぜ説明書では、全部コンピュータが行なっているよ

うに書かれているのですか」

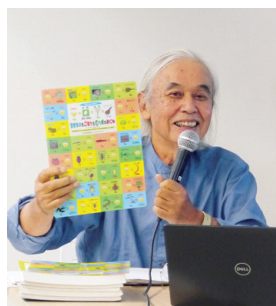
「それは技術には入らない部分ですから」

なるほど、「技術」だけではなく、「仕事」が欠かせないというわけか。スマート農業のこういう部分に目を向ける「哲学」がいる。

農地がまったくない東京の江東区に出かけて驚いた。

「公園では赤トンボがよく飛んでいますよ」と話す人がいた。「どこの田んぼから飛んでくるのでしょうか」と質問された。この人には、赤トンボが背負っている「農」のメッセージが届いていた。しかし、百姓のほうは、赤トンボに「伝えてくれ」と見送っただろうか。

「生産」も「技術」も生きものの「生」を語れない。赤トンボの「使命」を語れない。「いのち」がない業界からやってきた言葉だからだ。こうして、百姓から「生き



筆者。「虫見板」を使った減農業稲作や田んぼの生きもの調査をいち早く実践・主導（編）



6月20日発売！

## 『百姓・宇根豊と考える農の哲学

(上) AIは百姓になれるか』

『(下) 殺さずに食べることはできるか』

宇根豊著、農文協、各税込1980円



ご注文は巻末のハガキかFAX注文書で

もの同士」だという感覚が失われ、「同じいのち」だという共感の世界が薄れてきた。

### 「また会える」から、殺生も許せる

イネの株間に張った足長グモの巣に、百匹あまりのユスリ蚊がかかっている。「生まれたばかりなのに、そうやって死んでいく生って何なんだ」と一瞬思う時もあるが、すぐにまた仕事に戻る。百姓は一生のうち、どれ

ほどの生と、そして死に包まれてきたかと思う。

百姓ほど生きものを殺す職業はない。田畑を耕すのは、草を殺すためでもある。余った苗や果実は捨てざるをえない。また人間は毎食、生きものを殺して食べる。なぜこの「殺生」を悩んだりしないのだろうか。「農」の最大の発明は、この「殺生」を許されるようにしたことではないのか。

自分でタネを採るから、芽が出たときに「生まれ変わってきたね。また会えたね」と心から感じる。この「生まれ変わり」と「また会える」ことこそ、農の本質・原理ではないか、とこの歳になってつくづく思う。「いのち」を途切れないようにしたのは「農」の本質的なことさではなかったか。「そんなことは、あたりまえだ」と言ってほしくない。

考古学者が言う。「縄文時代前期に野生のつる豆の栽培が始まったが、3000年後に粒径が2倍になり『大豆』になった」と。縄文時代の百姓は3000年間、大豆の「いのち」(タネ)を途切れさせることなく、伝えてきたわけだ。この年月の長さに、思いをはせたい。

### 農の仕事は「めぐみ返し」でもある

その生きもの(作物)を手入れしてきたから、「いの

ち」を見送ることができる。そして「また会いたい」と願うから、百姓を続けようと思う。

隣のばあちゃんがいつも言っていた。「今年もまた、草取りができる」と、「草が呼びよる」と、そして「草取りが一番楽しい」とも。なぜか。手仕事だったから、相手の生きものと毎年顔を合わせ、話をする事ができたからだ。

百姓にとっては仕事は労働ではなく「めぐみ」でもあった。そして「また会える」ように月日を重ねることが、「めぐみ返し」であった。「生産」や「技術」には、ましてAIには、こうした感覚がまるでない。

## 農には哲学が必要だ

アゼ道を歩いていて、小さな花にふと目をとまる。ほとんどの名前を知っている草ばかりだ。でもなぜ花に目をとめるのだろうか。百姓していると、そういう習慣が強くなる。それはどうしてだろうか。そういう疑問に向き合う思索もあつたほうがいい。

急に涼しい風を感じて、顔を上げる。「ああ、先ほどから吹いていたんだろが、気づかなかつたな。でも、なぜ気づいたのだろうか」。疲れた身体が風と響き合っていて、私に伝えてくれたのだ。こうして風は、百姓の中で

「血肉化」されてきた。ここには天地自然を内側からとらえる「哲学」が必要だ。

そう、無意識に身体が動くことは当然なことだけれど、生きものへの、天地自然への情愛も無意識に働いている。田んぼが干上がってオタマジャクシが死んでいたら、「悪かった」と謝ってしまう。べつに蛙のために水を溜めていたのではないが、百姓仕事とは無意識に生きものの生に感応している。こうした世界を解明し、言葉にする「哲学」がほしい。

多くの百姓は、「農」を自分の「内からのまなざし」で感じとってきた。しかし、それを「農」の本質・原理として、言葉にすることはなかった。表現しようとしても、既成の言葉や価値観や知識を借りてしまうと、途端につまらなくなる。そろそろ百姓自身の言葉で、語らなくてはならない。だから「農の哲学」というものは、語り方の提案でもある。

生きものやアメツチ（天地自然）に成り代わって語りたい。人間をドーンと突き放さないと、まるでこの世とは別世界の「農」の豊穡さは伝わらない。最後にエラそうなことも言わせてほしい。今度の本（前ページ上）は、その手本になると思う。

（福岡市、百姓・思想家）